

輸入盤青レーベルは三桁の手書ナンバー付けられし  
まま 猿田史子

山口県の湯田温泉にある中原中也記念館を訪ねての一連中の作。私の父は中原中也より二歳下だった。我が家にもむかし、父の愛好する手回しの蓄音機があり、SPレコードがたくさんあったのをおぼえている。昭和前期の青年たちの西欧音楽へのあこがれ。この一首、表現があくまでも具体的な点が短歌としての魅力。

声を出す久方ぶりの劇場でマスクはずして響き確かめ  
矢代朝子

新型コロナウイルスの影響で、劇場等がずっと閉鎖状態の日がつづいて、ひさびさの公演か。あるいは稽古に入ったのだろう。私にはわからないが、舞台上立つ時の俳優独特の感覚が読める作。

歌うこと許されぬ音楽室からは三十人のハミング聞こえる  
吉本万登賀

高校の音楽の授業である。これも新型コロナウイルスの影響で、通常の授業ができないのであろう。大きく口を開けない、息をつよく吐かない、音楽教師の苦肉の策なのだろう。作品としては、どこことなくユーモアを感じさせられ、そこがいいと思う。私だけの感覚だろうか。

会うことはすなわち直に会うことと知る画面上の友を見ながら  
吉川七菜子

オンラインでつながって画面で会うことは、じつさいに会うのとはまるで別、という当たり前のことをあらためて実感した、という一首。オンライン会議とか、オン

ライン座談会に私も参加することがあるが、じつさいの会議とか座談会とはまったくちがう。そんなことを実感しただけでも、コロナ騒ぎの収穫かもしれない。

盆休み最後の午後のZOOM歌会髭を伸ばしている  
大人たち 廣間菜月

本来裏にあるべき日常が表に突出した場面。「大人たち」の緊張感のなさをクローズアップして見せた一首である。とがめるでもなく、ありのままをそのまま短歌形式に仕立てた荒削りの魅力。ZOOMの会合に自宅のパソコンで参加するときなど、つい日曜日気分で、髭も剃らず普段着のまま、などということが私などにもある。

藻塩焼く浜の松風巻き上がりてふは煙となる夢を見  
梶間和歌

第二句以下「……浜の松風巻き上がりてふは煙となる夢を見る」は、なかなかのイメージで注目した。ただ、「藻塩焼く」はどうだろう。これは古代からの製塩風景で、万葉時代から瀬戸内海の沿岸部でよく見られた景色だった。現在はそんな風景は見られないから、初句で、あつ、これは江戸時代以前のイメージだな、と判断されてしまふ。マイナス効果だったと思う。

古里の小径につづく思いして植えた鶏頭 十ばかり  
三浦尚子

古くはカラアイと呼ばれ、万葉集にも登場する日本人には古くから親しい鶏頭の花である。だからだろうか、「古里の小径につづく思いして……」が、客観的にもぴつたりと来るように読める。